

福岡大学 医学会ニュース

No. 43

福岡大学医学会 福岡大学医学部内

医学部の卒後教育 について

名誉教授
前腎センター教授
内藤 説也



私は今年の三月で福岡大学を退職した。六十六才になるちょっと前の六十五才なので、日本の他の大学では大抵丁度定年の時期ではあるが本学の教授の定年は七十才までであるので、定年前退職ということになる。福岡大学当局からは、このような事情にも係わらず名誉教授の称号を頂き感激すると共に大変恐

のかかなり田舎の病院に勤務に出された。それらの病院には教室の先輩で卒後七、八年から十二、十三年ぐらいの医師が院長など、副院長などの資格を持って、内科の責任者として勤務していた。私も入局三月後にこのような出張に出され、先輩医師の指導に従って四十人ぐらいの入院患者を持ち、午前中に二

ように我々の若い時代には医師になりたてに沢山の症例をみせられていた訳である。
翻って我が福大をみてみると殆どすべての卒業生は研修医となつて大学病院か又は市内の大病院で研修を受けている。立派な検査施設や診療機器を利用して診療に参加してしている訳で羨ましいとも思われるが、その診療に主体性は全く検査・診療機器に振り回されている感じがしないでもない。実地診療に優れた外国の医師と一緒に検査設備の乏しい未開発国などで働いた場合にはかなり見劣りして見られるのではないかと危惧している。そこで、かなりの研修医や医学部学生に恨まれると思うが卒後二年間の大学での研修の後に、おそらく医師になる前と思われるが、国内のかんりの田舎の病院か、又は未開発国の病院に勤務を義務づけたらどうであるうか。現在医療者が一般市民から指摘されている、患者へ



教育計画部発足にあたって

教育計画部教授

出石 宗仁



本年四月から福岡大学医学部の教育改革を促進するための部署として教育計画部が発足しました。名称や内容はまちまちですが、同様の部署は全国的にも二十数校に設置されています。本校ではまず教授一名と教育技術職員三名(うち二名は従来の国試対策室の職員)でスタート

しました。現在の医学教育改革の方向性は、医療過剰、医療不信といった社会的背景のもと、臨床実習を重視し、卒業直後の臨床能力を欧米や他のアジア諸国の医学部卒業生と同等のレベルにまで向上させることに向けられています。本年三月には厚生労働省、

文部科学省の強力な支持のもと文部科学省の諮問団体である医学・歯学教育調査研究協力者会議から医学教育の「モデル・コア・カリキュラム」が発表され、次いでこれを基本に臨床実習前の学生の到達目標が達成されているか否か、臨床実習で患者に接する前に習得しておくべき知識、技能、態度が備わっている

か否かを確認するための全国統一の物差しを、全国の医学部が協力して作成し実施していくこととする「全国共用試験」も平成十四年度入学生からの本格実施を目指して準備中です。モデル・コア・カリキュラムの実践には、講座の再編を伴う

ようなカリキュラムの改革、教育方法としてのテュートリアルやクリニカル・クラシックの導入、臨床技能評価のためのOSCE(客観的臨床能力試験)の導入と多くのことが要求されており、教育計画部としては学部長や教務委員並びに各種委員会(基礎・臨床カリキュラム検討、臨床実習検討、授業評価)と協力して、改善計画を立案し、教務委員会、教授会で審議決定していただくことが大きな仕事だと考えています。

今までのべてきました多くの変化を伴う教育改革に対処するために、専門部署の設置は時宜にかなったものだと考えます。しかし、今の人員で対処できる範囲には限度があり、また、システムの面をいくらか改革しても教育する側(教員)とそれを受ける側(学生)の双方の理解がなければ効果は期待できません。いかに多くの先生方に協力していただけるかが、福岡大学

福岡大学医学会
第四十五回例会ならびに
第二十四回総会(報告)

日時 平成十三年十月十日(水)
十七時から
場所 医学部臨床大講堂

第四十五回例会

- 進行 辻 祐治 「泌尿器科学」
- 一 開会の辞
 - 二 会長挨拶 医学部長 池原 征夫
 - 三 第三回福岡大学医学会賞受賞論文講演
内田 博子 氏(眼科・生化学第二)
立川 大介 氏(筑紫病院外科)
中島 英子 氏(内科学第二)
 - 四 第三回福岡大学医学会賞金賞論文投票

第二十四回総会

- 進行 畠 博 「衛生学」
- 一 議事
議題
 - 一、報告事項
二、平成十二年度会計報告および
平成十三年度予算案
 - 三、その他

第三回福岡大学医学会賞授与式

- 一 投票結果発表
- 二 授与式
- 三 閉会の辞

*第三回福岡大学医学会賞の開票結果、
論文名および受賞者写真は四面に掲載

次回の福岡大学医学会例会は平成14
年3月27日(水)に開催する予定です。

新 風

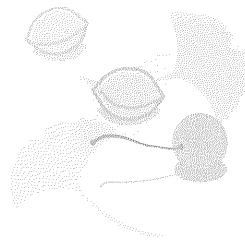
平成13年4月1日付けで昇格された方に自己紹介をしていただきました。

教育計画部教授 出石 宗仁

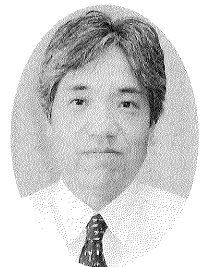


四月から教育計画部教授に就任しています。私と福岡大学との縁は一九七四年九州大学を卒業直後に偶然のきっかけから第二内科研修医として採用していただいたことに始まります。その後今までお世話になろうとは思っていませんが、二年度の母校での研修後改めて第二内科の医員として採用して戴き、荒川前教授の御専門であった

高血圧の基礎および臨床研究に従事してきました。一九八四年から二年間は米国クリブランドクリニックのリサーチフェローとして留学も経験させていただきました。この留学では多くの貴重な体験をし教訓を得ました。日本は常にアメリカの後を追いかけており、医学、医療の面も例外ではありません。今、まさに医学教育の改革として米国流の教育を取り入れようとしているところであります。留学から帰国後も、以前のように高血圧を中心に診療、研究を続けていきましたが、一九九四年十月から助教として循環器部門の教育の実務(カリキュラムの改訂、試験問題の作成と



内科学第一助教授 鈴宮 淳司



出身は北九州の小倉です。趣味はサッカー(できる体に戻りたいのですが)、読書、宴会です。一九八〇年宮崎医科大学を卒業、内科研修医を経て、宮崎医大一病棟(住吉昭信教授・現宮崎医大副学長)の元で酒の飲み方、勉強の仕方を厳しく指導されました。そこで病理認定医、また癌の浸潤と線溶系酵素の仕事で学位を取得しました。十七年間過ごした宮崎を離れ、一九九一年四月福岡大学一内科(奥村 伸教授・現名誉教授)に入局させて頂き、一九九四年より一病理菊池昌弘教授のご好意により一内科兼務で一病理で仕事をさせて頂きました。病理と臨床の二足のわらじを履く生活は大変ではありましたが、血液指導医も取得でき、充実した生活でした。田村和夫教授が赴任されたのを機に一九九八年四月より一内科専任になり血液腫瘍を専門としております。良い医学教育とは何かという事を学生、若い先生方と模索し、実施していきたく考えております。

大島南先生がおられ恵まれた環境なので、この環境を生かして教育をはじめとして、診療、研究を若い先生方とやっていきたいと思っております。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

病理学第二助教授 孟 品



私は昭和六十年七月中国上海にある復旦大学医学部(元上海医科大学)卒業後、故郷の雲南省にある昆明医学院第一附属医院の内科学として五年間勤務していました。その当時、多い時一日外来患者を百二十人ぐらいいましたのは印象に残っています。大変でしたが今から振り返ってみると多くの貴重な経験が得られ、現在の学生の教育や研究に役に立ち、実に有り難く思っています。平成二年九月中国衛生部の国費留学生として来日し福岡徳洲会病院で当時院長の木川和彦先生の指導のもとで充実した三ヶ月間を過ごしました。平成四年八月自費留学生として再度来日し本学第一内科浅野喬先生の糖尿病グループで糖尿病患者の血小板凝集能について研究を展開しました。二田哲博先生、立花克郎先生、漢幸太郎先生等の先生方と一緒に仕事をさせて頂いた楽しい研究生活を送りました。平成六年四月学位を取ろうということで大学院に

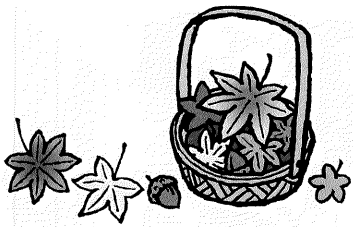
教室紹介 法 医 学

法 医 学

当教室は昭和四十九年四月に永田武明初代教授が九州大学より赴任し、開講され、昭和五十一年四月より講義が開始されました。昭和六十年に永田教授が九州大学教授として転出された後、昭和六十一年四月に二代目教授として柏村征一教授が山形大学より赴任され、現在は、柏村教授、影浦光義教授、原健二講師、助手二名、教育技術職員二名のスタッフと、大学院生一名、研究員一名、研究生三名が在籍しております。

法医学講義、三年次の医学概論演習、六年次の総合講義が柏村教授、影浦教授を中心として行われ、四年次の法医学実習は教員総出で指導にあたっています。また近年、土曜日や日祭日に法医学解剖が行われる時には、学生有志がネットワークを作り、連絡を取り合っており、解剖の見学に来ております。解剖衣を着て、ご遺体に直接触れたり、臓器を手についたりして、積極的に参加して勉強しています。

法医学では、法病理学、法中毒学、法血清学といった三つの特に重要な分野があります。法医学解剖における診断・鑑定等を中心とする法医学



病理学分野を柏村教授、柏木正之助手が担当し、剖検試料や毛髪・血液・尿等の生体試料における薬毒物分析等を中心とする法中毒学分野を影浦教授、原講師が担当し、血液型判定・DNA分析を含めた親子鑑定・個人識別等を中心とする法血清学分野を三好綾助手が担当し、それぞれの分野で鑑定実務、研究をおこなっています。

近年ニュースでも騒がれているように、世間では殺人等の凶悪事件が後絶たず、特に最近では薬毒物等の混入事件も多発しており、一回の解剖においても、病理学、中毒学、血清学などの全ての動員して、鑑定に当たる必要のあるケースが増えつつあります。我々は種々の鑑定において、生体から死体まで対象として取り扱いますが、鑑定結果に

血液・糖尿病科講師 安西 慶三



私は昭和六十一年に宮崎医科大学を卒業後、仁保喜之前教授の九州大学第一内科(現病態修復内科)に入局し、昭和六十二年より大学で糖尿病と固形腫瘍の臨床と研究に従事しました。研究面では、1型糖尿病モデル動物に抗リン脂質抗体が糖尿病の発症ととも出現することを証明し、学位を取得しました。現在も1型糖尿病の発症機序についての基礎研究をしています。また臨床面では九大第一内科が血液疾患、固形腫瘍、肝疾患、

私は昭和六十一年に宮崎医科大学を卒業後、仁保喜之前教授の九州大学第一内科(現病態修復内科)に入局し、昭和六十二年より大学で糖尿病と固形腫瘍の臨床と研究に従事しました。研究面では、1型糖尿病モデル動物に抗リン脂質抗体が糖尿病の発症ととも出現することを証明し、学位を取得しました。現在も1型糖尿病の発症機序についての基礎研究をしています。また臨床面では九大第一内科が血液疾患、固形腫瘍、肝疾患、

はなかなか動きませんが、二年前は全日本選手権(四十歳以上の部門)に出場できました。今回、平成十三年十二月より第一内科(血液・糖尿病科)の田村和夫教授とで、糖尿病・内分泌を担当させていただきます。現在の私の臨床のスタンスになつております。その後平成四年に福岡徳洲会病院に勤務し、平成七年より福岡大学臨床検査医学で小野順子教授のご指導のもと、臨床検査、糖尿病の診療と研究に携わりました。趣味はテニスです。テニスは十一歳の頃から始めているので、もう三十年近くテニスを続けています。おかしな話ですが、未だに新しい発見がありまだ上手になれるのではと頭では考えています(身体

長い間

ありがとう
ございました。

(平成十三年一月一日〜九月三〇日まで退職された方)

○内藤 説也 教授「腎センター」

三光クリニックへ

○佐々木 淳 助教授「内科学第二」

国際医療福祉学院クリニックへ

○嘉数 徹 講師「外科第二」

東京大学第二外科へ

○白石 武史 講師「外科第二」

今給黎総合病院へ

○瀬尾 充 講師「消化器科」

浜の町病院へ

○半田 耕一 講師「救命救急センター」

南大牟田病院へ

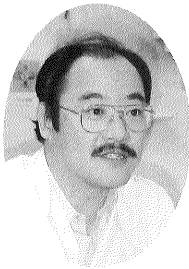
(以上、三月三十一日付)

○岡林 寛 講師「外科第二」

国立療養所福岡東病院へ

(以上、九月三十日付)

〔新風〕前頁につづき
筑紫病院脳神経外科講師
風川 清



だいております。本年度より脳神経血管内治療専門医制度が発足し、第一回の指導医五十人に入ることができました。今後は専門医の育成に力を注ぎながら福岡大学、筑紫病院にとけ込む努力を続けていきますので、どうかよろしく願います。

私は昭和五十七年に防衛医大を卒業しました。自衛隊中央病院、脳神経外科から平成二年に国立循環器病センター、脳血管外科に移動し四年間勤務しました。

歯科口腔外科講師
豊福 明



平成二年九州大学歯学部を卒業後、直ちに福岡大学歯科口腔外科に入局致しました。学生時代は、遅刻の王者、サボリの神様と呼ばれ、授業中も発作的に「峠が呼んでいる」と抜け出し、バイクに乗ってばかりの毎日でした。臨床実習中に、いつまでも義歯が合わないとか、歯の痛みがとれないとか、うじやうじやらと訴え続ける患者さんに遭遇し、

大変貴重な御助言を頂きました。また都教授の肝いりで、九大第一内科代謝生理研究室にも行かせて頂きました。当時、浜の町病院副院長の深町建先生や坂田利家助教から、疾患の見方や考え方に大きな影響を受けました。当初は研究者になるつもりはさらさらなかったのですが、様々な経験を積みながら一例、一例をまとめていくうちに、自分の臨床に直結したテーマで学位まで頂き、不相応の幸せと思っています。元来の素行の悪さから、都教授から今まで（今でも）随分、叱られました。反面教師に

学部のゆつくりとした粘性流体を扱っている研究室に入り、透過性のある壁をもつパイプ内を拍動性の粘性流体が流れていくときの挙動をシミュレーションするという、非線形の難題に取り組みるところから始まりました。人工血管の開発をもうろんだこの研究は、結局、私の能力をはるかに越えるものだとわかり、実際の人体での循環動態をまず観察するために、千葉大医学部に再入学しました。卒業するころには、治らない病気の多い神経内科が未知の曠野に感じられ、そこに進みました。現在、神経変性疾患の病態形成に関わるメカニズムを仮説を立てて実証しようと考えています。いくつかの分野を少しずつかじってきたことを自分なりに生かして、統合できれば理想的です。薬学部

薬学部教授
高橋 三津雄



本年四月から薬学部薬物治療学教室を担当させていただくことになりました。三月まで四年間、医学部第五内科山田達夫教授のもとで神経内科医として勤務しておりました。これからも大学病院での診療は継続いたしますが、薬学部において医学部・病院との橋渡し的な役割を少しでも出来ればと希望しております。

九州に移って丸四年が経ちました。ずっと続けている山登りと溪流での釣りに、は格好のフィールドにいるな、と実感しております。今後とも皆さまの御指導をお願いいたします。

学 位 取 得

次の方は、福岡大学より医学博士を授与されました。

課程修了による学位取得者

八 尋 正 文 (病態構造系専攻)
井 上 晴 豪 (社会医学系専攻)
(以上、平成12年9月17日付け)

吉 岡 晋 吾 (病態構造系専攻)
重 川 誠 二 (病態構造系専攻)
内 田 博 子 (病態構造系専攻)
入 江 慎一郎 (病態構造系専攻)
蒲 池 紫 乃 (病態構造系専攻)
巻 幡 聰 (病態構造系専攻)
力 丸 文 秀 (病態機能系専攻)
山 野 貴 史 (病態機能系専攻)
毛 利 正 玄 (病態機能系専攻)
吉 村 一 朗 (病態機能系専攻)
古 賀 崇 正 (病態機能系専攻)
岩 橋 英 彦 (病態機能系専攻)
武 田 卓 (病態機能系専攻)
久良木 隆 繁 (病態機能系専攻)
藤 見 幹 太 (病態生化学系専攻)
八 尋 英 二 (病態生化学系専攻)
西 岡 智 子 (病態生化学系専攻)
(以上、平成13年3月21日付け)

論文提出による学位取得者

一 鬼 勉 学外者
劉 強 外国人研究員
天 本 敏 昭 脳神経外科学研究生
浦 江 昭 憲 脳神経外科学研究生
大 野 哲 二 脳神経外科医員
中 川 夏 司 学外者
大 隈 健 司 学外者
武 田 誠 司 内科学第四助手
秋 吉 祐一郎 整形外科医員
呂 紹 睿 整形外科科学研究生
石 井 久 雄 内科学第四研究生
栗 田 隆 志 学外者
柴 田 和 典 公衆衛生学研究生
豊 福 明 歯科口腔外科学助手
(以上、平成12年10月3日付け)

甲 斐 保 解剖学第二研究生
島 崎 加 恵 病理学第一研究生
秋 吉 信 男 消化器科助手
岡 本 育 救命救急センター助手
(以上、平成13年3月21日付け)

教室紹介

耳鼻咽喉科学

教室の開設は昭和四十七年四月で、曾田豊二初代教授が着任されました。現在は加藤寿彦二代目教授以下、原田博文、坂田俊文、柴田憲助、今村明秀、毛利毅、小倉朋子、近藤毅の八名、筑紫病院は、森園哲夫(教授、宮城司道の二名のスタッフ

フと医員、大学院生、研修医等合わせて二十数名です。本院と筑紫病院とが積極的に人の交流をはかり、臨床をば授以下、原田博文、坂田俊文、柴田憲助、今村明秀、毛利毅、小倉朋子、近藤毅の八名、筑紫病院は、森園哲夫(教授、宮城司道の二名のスタッフ

三コマを行っています。診療については、耳、鼻、副鼻腔、口腔、咽頭、喉頭の他、気管、食道、顔面、頸部といった広範囲の領域の疾患を取扱っています。聴覚、平衡覚、嗅覚、味覚といった生活の質(QOL)と関連のある感覚器の疾患の診断・治療も行っています。最近では、両側聾の患者に対して、失われた聴力を快復する人口内耳の埋め込み術やそのリハビリテーションにも力を入れています。研究室については開設以来一貫して聴覚(主に誘発反応、内耳電気生理、聴覚障害、耳鳴や耳閉感など)について研究を行っています。現在、西オーストラリア大学に留学中です。その他、嗅覚(他覚的検査、誘発反応、脳磁図など)や頭頸部腫瘍の臨床統計学的研究も行っております。教室行事では、春の花見会、医局旅行、海水浴、同門会、忘年会、歓迎会があり教室員は親睦を深めています。

(文責 原田)



海外だより

ニューヨークより

生化学第一 中 村 研

ニューヨークに来て1年が経ちました。私の勤めるニューヨーク大学医療センターはマンハッタン島のイーストリバー河畔にあり、五番街などの華やかな雰囲気とは趣を異にします。ニューヨーク大学は150年以上の歴史を持ち、基礎研究棟の建物は1952年に建てられました。私はその6階にある細胞生化学講座に属していますが、約15のラボがそれぞれ独立して活動しています。その中で総勢約100人のポスドクや大学院生が日夜研究しています。(約)という訳は日本でいう科学研究費が支給されれば、それなりのスペースが与えられ、それがラボと言えバラボとなり、またポスドクは猛烈な勢いで入れ替わっていますので講座の秘書でさえ正確な数を把握していない状態だからです。私の属するラボの紹介はボスであるFrey先生が書いて下さいました(下記)。

こちらに来て驚いたことは日本では考えられないような膨大な基礎研究費が使われていることです。最初は使い捨てのピペットがなかなか捨てられなくて笑われたりしましたが、慣れとは恐ろしいもので今では1回の実験で20本は使っています。

ある時、電車の中で文献を読んでおられますと、横に座った白人男性が何を研究しているのかと聞いてきました。リンパ球だと答えると、最近研究者の間で話題になった内容について質問してきました。この人は事務系の仕事をしていると聞いていましたが、生物関係のトピックにも感心があったのでしょうか。さらに、子供の入学手続きに行った小学校の事務員からも同じように質問され驚きました。このような基礎研究に対する国民の興味の大きさが私に20本のピペットを捨てることを許しているものと思われます。日本では小泉内閣が成立し重点7分野に税金を投入するとし、科学技術もその中に含まれています。私はそれに加えて国民の基礎研究に対する関心の高揚が是非とも必要だろうと考えさせられました。

写真はラボのメンバーを撮ったものです。中央の方がFrey先生（ボス）です。底の深い思いやりと大陸的な寛容さは、日本の小市民である私には真似ができないと驚嘆します。とは言っても、他のアメリカ人同様おしゃべり好きで日本からのE-mailを歓迎！と言っておられます。

留学の機会を与えて下さいました福岡大学に感謝します。渡米にあたりアドバイスをいただきました医学部長の池原征夫先生、暖かく見送っていただいた第一生化学および旧第一内科学の皆さんに感謝します。最後に、御自分の留学体験を示して下さい筑紫病院の佐々木悠先生に感謝します。先生の体験談のお陰で最初の大変な1ヶ月間を乗り切ることができました。



Our laboratory studies the immune response to cancer. The long-term objectives of our research is to understand why antigenic tumors can escape elimination by the immune system; understanding this phenomenon can potentially provide an opportunity for cancer treatment. Our hypothesis motivating this research is that tumor growth induces defective immune responses thereby permitting growth of antigenic tumors. We utilize several different rodent models to pursue this question. We have noted that tumor growth causes a defect in the function of a specific type of T cell which is required for tumor killing, the CD8+ T cell. These cells which infiltrate tumors are unable to perform their killing function and we are studying the biochemical basis for their defective properties. To date we have found that these T cells cannot release the subcellular molecules that perform the killing of tumor cells implying that there is a block in the transmission of signals within the T cell which is required for killing function. At present we are investigating the signal transduction pathways in these T cells in an effort to determine the specific biochemical defect, which if possible to reverse, is expected to permit recovery of lytic function and hopefully resumption of tumor killing.

Alan B. Frey, PhD

E-mail: FREYA01@popmail.med.nyu.edu

祝「第3回福岡大学医学会賞」



左から、有吉朝美病院長、立川大介氏、中島英子氏、内田博子氏、池原征夫医学部長

金賞(1名)

内田 博子氏（生化学第一・眼科）

Production and Accumulation of Thrombospondin-1 in Human Retinal Pigment Epithelial Cells

銀 賞（2名）五十音順

立川 大介氏（筑紫病院外科）

Do the Expression of CD44, Apoptosis and Thymidylate Synthase Inhibition Rate Correlate with the Efficacy of Chemotherapy in Colorectal Cancer?

中島 英子氏 (内科学第二)

Angiotensin II Antagonist Prevents Electrical Remodeling in Atrial Fibrillation

医師国家試験に116名が合格

第95回医師国家試験（3月17～19日実施）に、本学から141名が受験し、116名（新卒77名・既卒39名）が合格した。合格率は82.3%。
合格者氏名および研修先は次のとおり（福大病院は科名のみ）。

安達 正武	産婦人科	田宮 正恵	消化器科	石川純一郎	整形外科
鮎川有希子	神経内科	永廣 ゆり	精神科	石橋 英樹	内科第三
荒尾友美子	皮膚科	新居 浩平	筑紫病院脳神経外科	井本 佳孝	徳島大学内科第二
有光 帥二	岡山大学脳神経外科	林 大介	愛知厚生農業組合連合会昭和病院	上田 幸代	放射線科
池 周而	内科第二	林 博之	熊本大学耳鼻咽喉科	菊間 幹太	筑紫病院消化器科
市頭 教克	眼科	比嘉健一郎	琉球大学第二内科	工藤 忠睦	内科第一
猪熊 匡子	九州大学外科第一	平野 玄竜	久留米大学産婦人科	古賀 文二	皮膚科
猪俣慎二郎	消化器科	福井 章正	久留米大学産婦人科	武村 有祐	脳神経外科
上野 哲子	耳鼻喉科	福岡三代子	産婦人科	立元恵里子	宮崎医科大学内科第一
畦平 記子	産婦人科	福島 幹生	循環器科	土田 朋子	岡山大学内科第二
卜部 祐司	広島大学内科	福元 修	鹿児島大学内科第一	内藤 雅康	外科第二
太塩 敦郎	徳島大学内科第二	藤岡 朋代	筑紫病院内科	西田 武司	救命救急センター
太田めぐみ	麻酔科	別府 徹也	三重大学内科	野口まゆみ	岡山大学小児科
太田 良子	産婦人科	外尾 恒一	眼科	花野 貴幸	内科第三
大竹 良子	産婦人科	榎 研二	外科第二	平井 奉博	救命救急センター
大矢佳奈子	産婦人科	光延 祥代	小児科	深水 康吉	外科第一
岡村 圭祐	循環器科	安野 哲彦	内科第四	船越 禎広	内科第三
尾崎 宣之	熊本大学外科第二	柳 大三郎	循環器科	古屋由美子	内科第一
鬼倉 基之	日本大学内科第二	柳澤 義和	九州大学整形外科	又吉 泉	精神科
勝瀬 良子	広島大学内科	矢野 豊	筑紫病院消化器科	松永 優子	長崎大学内科第二
加藤 大祐	外科第一	山口 史彦	整形外科	丸井由佳子	麻酔科
河岡 大悟	脳神経外科	山口 良介	外科第二	三宅 徹	外科第一
川村英美子	広島大学内科	吉田 真紀	麻酔科	山田 彰子	外科第一
木村 俊之	広島大学内科第一	吉田 康浩	外科第二	米倉 順孝	小児科
木山 貴彦	整形外科	渡邊 智	九州大学耳鼻咽喉科	上田 誠	久留米大学小児科
清原 義明	精神科	渡邊 隆	消化器科	加藤 文章	外科第二
重森 裕	産婦人科	フアン ジェーン	眼科	川本研一郎	筑紫病院内科
白川 裕一	心臓血管外科	小林 達樹	整形外科	坂下 有	広島大学放射線科
杉原 充	循環器科	高嶋 英夫	循環器科	佐藤 尚志	京都府立医科大・耳鼻咽喉科
善利 史子	東京大学産婦人科	信藤 真理	整形外科	田中 研次	外科第二
瀧 もとみ	佐賀医科大学麻酔科	平田 顕士	麻酔科	吉永 典貴	眼科
田坂 健彦	九州大学外科第一	古山 正大	循環器科	泉 仁	眼科
田中美和子	広島大学内科	三好 一宏	愛媛大学内科第一	富永 信平	内科第五
堤 信	小児科	武藤 官大	麻酔科	西川 泰章	国立大阪病院皮膚科
水流 弘文	外科第二	榎 信一朗	筑紫病院内科	下川 雄弘	内科第二
富岡絵里子	消化器科	原田千枝子	麻酔科	富田 健一	内科第一
中村 守	筑紫病院内科	松永 泰明	精神科	松嶋 潮	整形外科
中村 友紀	循環器科			泊 淳一	整形外科
永川健太郎	産婦人科			山口 宣久	皮膚科